

# まんだら通信

第147号 (通巻178号)

平成20年(2008)09月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>  
E-mail [ryusho@awa.or.jp](mailto:ryusho@awa.or.jp)



## 医光寺様の寺子屋座談会

おととい九月六日、富津市の医光寺の檀信徒の皆さんがおいでになりました。

副住職の庄司さんとは、十年ほど前に京都東山の麓にある総本山智積院での『伝法大会』で、二回に亘って半月ほど、一汁一菜の食事をしながら同室だった時以来のお近づきの一人です。

医光寺様のホームページを見ると、『寺子屋座談会』をしていて、一年に一度は日帰りの研修をしておられるようです。ご本人は普段は県の中央児童相談所にお勤めなので、休日はゆっくりしたいでしょうに、偉いなあと思いました。

お着きになると、皆さんで早速本尊様の前で、朗々とお勤めをしたあと「こちらの御前さ

まにご法話をしてもらいます。」といわれて逃げ出すわけにも行かず、こんななにか困ったことはありませんでした。

仕方なしに、皆さんなら知っている、私とこのお寺とのご縁について話しました。

つくづく思うのですが、全く縁がないと思っていたお寺に弟子入りして、而も住職になるなど、ほんとうに不思議なご縁としか言いようがありませんから。きつと、前世でやり残したことを、もう一度性根を据えてやらなさい、という仏様のお心なんでしょうね。

## 二十四日は施餓鬼会です

折りから秋のお彼岸、ご先祖や特にこの一二年にあの世に旅立った人が一番喜ぶことをする、最も相応しい時節です。

仏教の教え・・・というより宗教総てで一番大切な、布施の心を養う良い機会です。

当日は例年通り、丸山の東光院のご住職、近藤僧正がお話しを下さいます。

どなたも揃ってお参り下さいますよう、お待ちしております。

ところで、本尊様の前で法要が終わると、お坊さま達は場所を施餓鬼壇の前に移動します。導師が前に進み出たとき、一人のお坊様がおもむろに立ち上がり、文語調で朗々と読み上げる文章があります。お施餓鬼の意味を集めた人たちに説明しているのですが、おおよそ次のようになります。

「お釈迦様の一番のお弟子といわれた目連尊者のお母様が、あろうことか、我が子可愛さの余りの、心にもない物惜しみの報いで地獄に墮ちました。これを悲しんだ目連尊者が、如来つまりお釈迦様に教えて戴いた通りに、大勢のお坊さんを招いて供養をしたところ、お母様はたちまち地獄から救われたのでした。

源仁僧都や弘法大師なども、亡き人への供養は欠かすことがありませんでした。高僧といわれる昔の人達さえそうだったのですから、後世の私たちは尚一層励まなければならぬのです。

今ここで、回向をする人々は、インド・中国・日本と仏教を伝えた高僧達を始めとして、七代まで遡るほどの親族縁者、殊にお檀家の皆さんがお塔婆を供えて供養を志す霊位など、数えることもできません。

世界中の内乱・飢餓・天災などで命を失い、弔われることのない沢山の有縁無縁の幽魂達よ。どうぞ、この清らかな場所に集まり甘露の法味に浸って、お浄土に生れることが出来ますように。」と。

もともと餓鬼といわれる幽魂は、仏様の慈悲に見放されたと思つて、明るい世界を避けて脅えてさまよっています。

ですから、本来は夜を待つて戸外で、出来る限り静かに行うのが正しいのですが、それではお参りする側が困りますから、実際は昼間に行います。

紫雲寺では、古式を失わないように本當の笹竹を使い、施餓鬼壇の五如来の幡も手作りをして、供え物も儀軌や昔の書物を参考にし、しつらえるように心掛けています。本来ならば、四ヶ寺合同でなくそれぞれのお寺の、ご本尊様の前で参る方が相応しいのですが、残念ながら三ヶ寺が無住です。早くその時が来るように、私としては願っています。



◆今月の野草はハマエノコロ【いね科エノコログサ属】です。名前に浜が着くとおり、海岸近くの僅かの隙間などを頼りに生えています。草丈は精々20センチ。「何の役にも立たないただの雑草。」というのは浅はかな人間の目で見れば、『まんだら世界』の一角にチャンと居所があるのですね。

エノコログサという名前の由来は、穂が子犬のシッポに似ているからだそうで、『原色牧野植物大図鑑』には「東京では猫じゃらし」と書いてあります。海岸道路の舗装の隙間に、しっかりと生きていました。

2008/09/09 龍渉

オカザキ)。幸福の花咲く樹。シェーン。陽はまた昇る。明日への遺言(藤田まこと)。他に雑誌が5誌。とても読み切れません。

◆政治の世界が、俄に賑やかになってきました。去年は目先の“絆創膏問題”、“年金問題”、“事務所費問題”で、「この国はどうすればいいの」という本題を見失って、変な人々を選んでしまいました。何れ近いうちに総選挙でしょうが、今度こそ、本当に国を思う人を選びましょう。民主主義って自分たちで“お上”を選ばなければならぬという、シンディ仕掛けです。孫や子のために勉強し直そうと思っています。

◆お盆の棚経での挨拶。「こんな暑い夏って、生まれて始めてですねえ」でした。みんな同じ思いなんだと、妙に納得しました。

流石に9月。昨夜から空気がサラッとして、気のせいか空の色が秋色になりました。

◆8月買った本。郷土千葉の歴史(ぎょうせい 絶版)、右寄りですが、何か。(WAK さかもと未明)、憲法九条は諸悪の根源(PHP 潮匡人)日本人の忘れ物(産経新聞社 石井英夫)。買ったビデオ。TOKKO(特攻)監督リサ・モリモト。ヒロシマ・ナガサキ(監督スティーヴン・

## 余滴



それにしても、何ですかこれは。「自分さえ得をすればいい」などと、いつから日本人はこんなバカで恥知らずになつてしまつたのか。昨日は、食用にならない毒の入つたコメを仕入れた業者が、食用として転売していたことが発覚しました。ばれれば身の破滅だということぐらい、子供でもわかる話でしょうに。他にもあり過ぎて、毎日のニュースの時間には、顔を背けたくなるような話題ばかり目に入ります。

戦前の日本人は、世界の人がうらやむ資質を持つていました。

日露戦争で日本が勝利した時、インドではお祝いのパレードが一週間も続いたと、『東京裁判』でただ一人日本無罪の判決を下した、パール判事の回想がありますし、トルコにはトローゴ（東郷）という名前の人がいるそうです。来日した有名無名の人が、思いやりがあつて自分に厳しく、公正であることに誇りを持つ人たちであると、みんな褒めています。一つだけ例を挙げましょうか。詩人で駐日大使だつたフランス人、ポール・クローデル（1869-1955）の言葉があります。

「私がどうしても滅びて欲しくないと思う民族がある。それは日本人だ。・・・彼らは貧しい。しかし高貴である。」高貴でない人は、一目置かれないのです。如何に大金持ちでも。

## 敵兵を救助せよ

雑誌『正論』10月号のジャーナリスト 惠隆之介さんの文章をご紹介します。

「大東亜戦争中、ジャワ海の制海権争奪に敗れた米英豪連合軍艦隊の残存艦艇は、日本艦隊の間をついて同海域からの脱出をはかつた。昭和十七年三月二日午後二時頃、二隻の英海軍艦艇は、インド洋への脱出を試みてジャワ海北西海域において日本艦隊に捕捉され相次いで撃沈された。両艦の乗員合計約四五〇人は脱出し漂流を開始するが、約二十時間近く経過した翌三日、午前十時頃には生存の限界に達していた。

赤道下の強烈な太陽光、欠乏する水分、サメ襲来の恐怖で、現代の日本人では理解できないほど極限状態に達していた。一部将兵は自決のための劇薬を飲もうとしていたまさにその時、単艦で哨戒行動中の帝国海軍駆逐艦「雷」（いかずち）（艦長・工藤俊作中佐）に偶然発見された。

サー・フォールは、いよいよ機銃掃射を受けて最期を迎えると覚悟したところ、「雷」は救難活動中を示す国際信号旗を揚げて直ちに救助活動に入ったのである。

甲板に引き上げられた英海軍将兵を感激させたのは、汚物と沈没艦艇の重油で真っ黒になつた英海軍将兵を、小柄な「雷」乗務員が嫌悪することなく、両脇から真水とガソリンで一人一人丁寧に洗浄する光景であつた。

二二〇名乗務の駆逐艦が敵将兵四五〇人を救助する。通常なら反乱を恐れてここまで救助しない、しかもこの海面は敵潜水艦の跳梁が激しかった。まさに決死の敵兵救助劇であつた。

さらに「雷」は、潮流に流され四散している英海軍将兵を終日をかけて救助した。たとえ一人でも発見すると「雷」は必ず艦を停止し、総員で救助したのである。中には艦から投下された縄ぼしごに自力で上がれない将兵もいたため、「雷」乗務員が飛び込んで救助する光景もあつた。「雷」乗員は、敵將兵に供与する艦載の被服が底をつくと、自らの分まで進んで提供した。

サー・フォールはこの光景に「自分は夢を見ているのではないか」と何度も腕をつねつたと言う。それだけではない、救助活動が終了した頃、「雷」艦長は英海軍士官だけを前甲板に集めた。そしてこう英語でスピーチしたのである。

「自分は英王立海軍を尊敬している。今回貴官らは勇敢に戦つた。貴官たちは今日は帝国海軍のゲストである。」

そして彼らに士官室の使用を許し友軍以上の処遇を行った。

NHKのリポーターは、興奮を抑えながらも、なぜこのような美談が戦後の日本に伝わらなかつたのか不思議でならないと発言して中継を終えた。

さらに彼はサー・フォールが、「これこそ日本武士道の実践」と発言したことも付言していた。

サー・フォールは戦後、工藤艦長に救助への感謝を申し上げるべく、その消息を探し続けたが発見できなかった。

工藤艦長は戦後も存命したが、子孫がなく、昭和五十四年一月四日、七十七歳で病没し、工藤家は絶えていた。

また「雷」は昭和十九年四月十三日、メレオン島沖で米潜水艦の雷撃を受けて轟沈し全員が戦死している。このため海上自衛隊は英国海軍より工藤艦長の消息調査を依頼されていたが応じる事ができなかったのである。

平成十五年十月、このような状況下でサー・フォールは初来日した。海自は、二十六目行われる観艦式に彼を護衛艦「いかづち」（四代目）に招待した。当日、観艦式出港直前「いかづち」士官室で、サー・フォールが救助当時の模様を縷々語り、「ジョンサク・クドウ」、「イカヅチ」と敬意と郷愁をもつて我々に語ってくれた。私が胸を打たれたのは、観艦式も終わり一行が岸壁から約三キロの位置にある駐車場に向かつて歩いた時のことである。

当時八十四歳のサー・フォールは不自由な右足を引きずりながら、観艦式見学者の帰路を誘導する海自の下士官、兵に対し、いちいち立ち止まり、たどたどしい日本語で、「アリガトウゴザイマシタ」と丁寧に辞儀を繰り返すのであつた。

英国人でサーの称号を持ち、高位にある方がこの様な行動をする事は極めて異例なことである。サー・フォールは、この海自の下士官兵達の姿があつたの駆逐艦「雷」の乗員をほうふつさせたといいのだ。

平成十六年六月、私は在英日本国大使館防衛駐在官（デイフェンス・アタッシェ）を帯同して英国バースにサー・フォールを訪ねた。

彼は他の元英海軍士官二人を夫人同伴で招き歓迎の昼食会を催してくれた。この海軍士官二人もマレー沖海戦、ジャワ沖海戦で帝国海軍と戦い、生還した歴戦の勇者であつた。その中で戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」に乗務していたグレン・アレ元大尉が「偉大なる帝国海軍」と前置きして私にこう発言した。「マレー沖海戦の

際、英国海軍は当初、帝国海軍の戦力を過小評価していた。いや日本自体を軽視していた。

ところが帝国海軍航空隊の第一波が押し寄せた時、それが全くの偏見であつたことに気づいた。自分は当時、艦橋に居たが、最高指揮官のサー・トム・フィリップス提督が『こんな見事な雷撃は今まで見たことがない』と絶句したのをこの目で見た。そして彼は旗艦『プリンス・オブ・ウェールズ』と運命を共にされた」

「旗艦および随伴戦艦『レパルス』が戦闘能力を失つたと見ると、日本海軍航空隊は一斉に攻撃を止めた。そして護衛駆逐艦が両艦乗員の救助活動を開始したが一切妨害しなかつた。さらに我々を救助した駆逐艦が母港のシンガポールに帰港する際も日本海軍は一切攻撃を行わなかつた。我々は帝国海軍のこれらの行為に瞭目し、敬意を払うようになった」

アレ元大尉は、その後重巡洋艦「エクゼター」に転属、ジャワ沖海戦で撃沈され帝国海軍に救助された。そして戦後母国に帰還した。なおジャワ沖海戦時、沈没直後の英海軍艦艇から乗員が帝国海軍艦艇に向かつて懸命に泳ぐ光景が見られた。尋問の結果、「日頃から上官が、万一の時は日本海軍艦艇に向かつて泳げ、きつと救助してくれる」と発言していたという。

以上は惠氏の文章の抜き書きです。転載出来なかつた感動的なお話が沢山あります。『正論』一〇月号か惠氏のご本『敵兵を救助せよ』（章思社）をお読み下さい。

フォール卿の恩に報いるため、惠氏が中心になり現在経済的に不遇な卿が、工藤艦長の墓参などのため来月来日する為の資金を募集中です。

郵貯番号01740161135085  
名義 サムエル・フォール卿来日支援基金